The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞Bernice L. Hausman, CHANGING SEX
Author(s)	末永，颯
Citation	共生学ジャーナル. 2025, 9, p. 243-249
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102010
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評

Bernice L. Hausman
CHANGING SEX
DUKE UNIVERSITY PRESS、1995 年、245 頁。

末永 颯*

1. はじめに

本書はバーニス・ハウスマンの主著の一つであり、今日日本でも盛んな LGBT などの性的マイノリティに関する議論の際に必ずと言ってよいほど想定される、ジェンダー概念の出現の経緯を、医療技術の発展とトランスセクシュアルの要求の出現との関係から示すものである。

バーニス・ハウスマン博士は、バージニア工科大学の英語学科に 23 年間在籍した後、2018 年からペンシルベニア州立大学医学部人文学科に所属している。研究テーマとしては、公式の場における医療言説に関する論争である。彼女の著書でとりあげられるのは、性差の歴史、母乳育児と母親の身体化、ワクチン接種論争などのテーマである。

ハウスマンはキャリアを通じて、科学技術研究やレトリック・ライティングなど、さまざまな大学院課程に所属し、レトリック（議論の枠組み）と記号論（記号体系の解釈）を重視し、医学の文化研究に沿った研究アプローチをとっている。性転換、乳幼児の摂食、ワクチン接種に関する彼女の研究は、医学と文化が相互に影響し合っていることを実証している。つまり、現代的な技術がいかに自然の体現を変化させ、いかに社会的論争を巻き起こしているかを強調し、健康な人であるためにはどうすればいいかという一般大衆の期待における緊張を実証している。

本書における最も重要な主張は、ハウスマンの研究手法である歴史的な分析に基づいた「ジェンダーが 20 世紀に出現した概念である」（Hausman 1995:ix）という一貫した主張である。この主張を支えているのはハウスマンによる、トランスセクシュアルの性転換の要求が医療技術の発展によって可能になったという「フーコー的パラダイム」に基づいた歴史的分析である。トランスセクシュアルは医療技術によってもう一方の性になる者のカテゴ

* 大阪大学大学院人間科学研究科 博士前期課程；u744607f@ecs.osaka-u.ac.jp

リーを指すタームである。この定義からトランスセクシュアル主体は医療技術がなければ認識できない。ハウスマンはこれをもって、トランスセクシュアルがこの医療技術が発達し性転換を認識可能である特定のパラダイムにおける歴史的な主体であるというのだ。ハウスマンは医学の言説から、トランスセクシュアルがインターセックスへの治療という技術的土壌の上に成り立つものとして分析した。インターセックスは性分化疾患と訳される、先天的に身体の男女を示す要素が一貫しない状態である。このような者が男女のどちらかとして生活したいと望む場合、医療技術による治療でその実現が図られる。ハウスマンはこのインターセックス患者がどちらの性になるべきかを医師が判断する際に考慮に入れる、患者自身の感覚が「ジェンダー」の現代的な用法の出現であると主張する。ハウスマンはこの用法での「ジェンダー」の出現を 1950 年代半ばにマークした（p.8）。このようにハウスマンは、ジェンダーという語が特定のパラダイムにおいて認識可能な、歴史性をもつ語であることを主張するのだ。

2. フェミニズムのアプローチとの対比

本書におけるハウスマンの仕事はフェミニズムなどのジェンダー研究者への批判という形態で展開される。フェミニズムは女性解放運動の根拠として始まった思想運動で、様々な派閥の多様な主張がある。例えば、本書でハウスマンが例にとるカルチュラル・フェミニズムには、「女性」というカテゴリーを自明のものと捉え、トランスセクシュアリズムはその「女性」カテゴリーに対する脅威であるとする主張がある(p.10)。この主張の後にもフェミニズムによる文化研究は続き、カルチュラル・フェミニズムにおけるカテゴリーの捉え方などに批判・検討が加えられてきた。しかしハウスマンは「カルチュラル・フェミニズム」と、「その後のフェミニズム文化研究」の両者に共通点があることを読み取る。その一つには両者のトランスセクシュアルの研究がジェンダーシステムの規範の研究につながると考えている点である。つまり、両者によるトランスセクシュアル主体の構築の分析において、テクノロジーとの関係が無視されており、ジェンダーシステムの影響

としてのみ現象を捉えているというのだ(p.11)。このようにハウスマンは、意見の違いや対立があるフェミニズムの異なる立場に共通する見解を示した上で、自身の「トランスセクシュアル現象の調査によるジェンダー概念生成の分析」という研究姿勢を示し、フェミニズムが扱うジェンダー概念の技術・テクノロジーとの不可分性を論じている。これはフェミニズムなどのジェンダー研究におけるジェンダー概念そのもののあり方を問い直すものである。

３．各章の概観

以下に各章の概要をごく簡単に示す。

第１章は、身体におけるホルモンの働きを記述する内分泌学が、トランスセクシュアルの出現にどのように貢献したかが扱われる。続く第２章は、内分泌学よりイデオロギーの影響を受ける美容整形の、トランスセクシュアリズムとの関係性が扱われる。第３章では、インターセックスと医療言説の関係と、ジェンダー概念の生成の過程が扱われる。第４章では、医療言説におけるトランスセクシュアルの主体性が論じられる。第５章ではトランスセクシュアル当事者の自伝を紹介し、医療技術とジェンダーの関係が読み解かれる。第１章から第５章までは技術の発展とトランスセクシュアリズムやジェンダーとの関係を論じるものである。変わって第６章は、バトラーの仕事を中心とするジェンダー理論のハウスマンによる批判と、その理論的分析を「フーコー的パラダイム」の歴史的分析と接続することをロラン・バルト『神話作用』における記号論を用いて試みられる。

４．歴史的なジェンダーの記号論的分析

ハウスマンは「ジェンダー」と「セックス」という２つの概念の関係性について、近年のジェンダー理論家の主張を紹介し、それを踏まえた上で自らの主張を展開する。アメリカの思想家であるジュディス・バトラーは『ジェンダー・トラブル』においてセックス/ジェンダーの二項対立を批判し、セ

ックスが文化的構築物である側面を指摘し、「セックスは常にジェンダーであった」と論じている。これに対しハウスマンは「バトラーがジェンダーの歴史的生成の過程を無視している」(p.179)と批判し、セックス概念の「再展開」の可能性を論じる。そしてセックスとジェンダーの関係の再考にはフェミニズム理論において扱いが不安定な「身体」を考慮に入れる必要性があると主張する。

ハウスマンはジェンダーの歴史性、身体を考慮に入れた、新たな理論を展開するために、これまで使われたコードとその働きを分析する記号論を用いる。この記号論的分析にはロラン・バルトの『神話作用』での議論が用いられるが、そこで用いられる神話という形態をとる記号システムの働きには、「二次意味体系（The second-order signifying chain）」（＝シニフィアン）が依存する「一次記号論（the first-order semiotics）」（＝シニフィエ）を否定し、前提なしに成り立つように見える意味体系、つまり神話になるというものがある。ハウスマンはジェンダーに働く神話の記号論を次のように認める。「「セックス」と「ジェンダー」に関して、医学的言説における「ジェンダー」の位置づけは、「身体」と「セックス（生物学的性別）」がシニフィアン/シニフィエとして、生殖主体であるというシーニュ（記号）を構成するという一次記号論的連鎖を構成し、「ジェンダー役割」と「ジェンダーアイデンティティ」がシニフィアン/シニフィエとして、異性愛主体（記号）を構成する記号論的経済に依存する」 (p.185)。記号とは「形式（シニフィアン）」が「意味内容（シニフィエ）」を指示するという連鎖を起こすことで成立する。つまり異性愛主体は、ジェンダーの説明を果たさずに完結したことにした記号なのだ。しかし実はその説明は、生物学的性別というシニフィエが身体というシニフィアンで指示され、生殖主体という記号が成立する連鎖を前提に置くことで既になされているのだ。本書ではバルトの神話を「深みがないため矛盾のない世界、明白なものに浸る広く開かれた世界を組織し、至福の明晰さを確立する。物事はそれ自体で何かを意味しているように見える」(p.186)と紹介している。つまりジェンダーがセックスの領野に居座ることを動機づけられ、その動機が自然化され、ジェンダーという神話は歴史を必要としなくなるのである。

またバルトは『モードの体系』で記号論の３つのレベル、「実コード」、「用語システム」、「修辞システム」を設定し、神話の記号論を補強している。実

コードとは「言語の意味とは別に形状、物質性を指す記号」であり、医学的言説では身体にあたる。実コードはシステムに属することで機能する。そのシステムのうち一つは「用語システム」であり、実コードが機能するように記述する、「操作」の働きでできる医療言説のようなものである。もう一つのシステムはこれに対する「修辞システム」で、実コードが社会的な言説、イデオロギー秩序の中に位置付けられる、「内包」という運動で属するシステムである。この２つのシステムは上記の一次記号と二次記号（神話）に対応する。このシステムを示すことは、ある現象において機能するシステムの働きを観察することに役立つ。

ハウスマンはこの記号論を用いて、内分泌学と美容整形を観察し、ジェンダーが本来セックスの領野である生物学的な現象を意味していることを示す。内分泌学と美容整形は、実コードとしての身体を、医療言説に沿って扱う「用語システム」が働く。しかし同時に、身体のセックスに基づく形態、機能、動作についてのイデオロギーの中で語られるという「修辞システム」も機能する。

５.歴史的または行為遂行的なジェンダー

バトラーと同じくアメリカの思想家であるゲイル・サラモンは『身体を引き受ける』において、ハウスマンの「医療技術の発展がトランスセクシュアルの主観性の最も重要な尺度」であるという主張が可能なのはハウスマンのトランスセクシュアルの定義が「ほとんど同語反復的な」ものであるからだと述べる（サラモン 2010:134-135）。サラモンはハウスマンの議論が性別適合手術を受けるものに限定していると指摘している。この議論で排除されているのは、多くの FTM トランスセクシュアル、手術をあまり、あるいは全く受けないトランスセクシュアル、ホルモン治療のみ受けたトランスセクシュアル、さらに「ノンバイナリー」などトランスセクシュアルではないすべてのトランスジェンダーである。つまりハウスマンは「身体への医療的介入により性別変更をするもの」というトランスセクシュアルの定義づけをしているが、この定義はトランスセクシュアルの教科書的な説明そのものでしかないのだ。

サラモンはハウスマンがトランスジェンダーの中に身体への医療的介入を求めない人がいるという主張に懐疑的であると読みとっている。

> この本で私が論じてきたように、身体と「ジェンダー パフォーマンス」との関係を調べることで、「ジェンダー」に対する別の種類の抵抗を描くことができる。部分的な性転換 (通常はホルモンによるもので、手術なし) を受け入れて生きる意志のある被験者がいる場合、これは技術的な性転換の試みが望んだ変化を達成していないことを示している可能性がある。これはまさに、身体が「性転換」のすべての手順に対応していないためである。言い換えれば、身体は「ジェンダー」を現実のものにすることに抵抗しているのだ。(Hausman 1995:199)

つまりハウスマンは完全な「性転換」はついぞなく、全てのトランスセクシュアルはトランスセクシュアルでしかあり得ず、また全てのトランスジェンダーはトランスセクシュアルの周辺部だと捉えているのだ。

サラモンはハウスマンがトランスセクシュアルに対して自律的な主体という見方をしていると述べる。ハウスマンは性転換の要求が可能な医療技術が、ジェンダー概念が生まれる条件だったと主張する。ここでのジェンダーは、トランスセクシュアルが本来は身体が表していない性別をアイデンティティとすることを可能とする論理であり、トランスセクシュアルは要求によって主体自身とその主体の社会的世界を成立させるような自律的な主体である。

ハウスマンはジェンダー・パフォーマティヴィティの考えを、性別の身体的しるしに反する「ごっこ遊び」とみなして却下している。しかし、サラモンから見たハウスマンによるトランスセクシュアルのアイデンティティに関する議論は、十分ジェンダー・パフォーマティヴィティとして語れるものである。サラモンによるとハウスマンの議論においてトランスセクシュアルを作るのは手術ではなく、要求そのものであるという。これはトランスセクシュアルが医療サービスを得るために医者に提示する要求によって彼らのアイデンティティが形成されるという、身体的な現象から言語的な現象へとそのアイデンティティを変えるというのだ。

結語

本書ではバトラーがジェンダーとセックスの歴史性を無視していると批判し、現在用いられるセックスとジェンダーの指すものの分離可能性を追い求めたハウスマンの議論が展開されている。その議論の道筋は現在の用法でのジェンダー概念の偏在性を実感させるものである。本書の意義はこのジェンダーがいかに思考可能になったか、トランスジェンダーの議論が可能になったか、いかにセックスと絡み合っているかを実証主義的に論じたことにあると言えるだろう。

参照文献

Hausman, Bernice L. 1995. *CHANGING SEX : transsexualism, technology, and the idea of gender. DUKE UNIVERSITY PRESS.*

Penn State, 2024. *Bernice L. Hausman, PhD*, https://pure.psu.edu/en/persons/bernice-l-hausman.(2024/09/30 最終アクセス)

サラモン、ゲイル 2010『身体を引き受ける』藤高和輝訳、以文社。

バトラー、ジュディス 1999『ジェンダー・トラブル』竹村和子訳、青土社。

バルト、ロラン 1967『神話作用』篠沢秀夫訳、現代思潮社。

バルト、ロラン 1972『モードの体系』佐藤信夫訳、みすず書房。